

春の元レジャーシートが小さくて
僕らは顔を持たずに話す

石橋トミ

レジャーシートの作り出す空間の小ささは、実際の関係性よりも僕らの距離を縮めてしまう。当たり障りのない匿名の会話から、すこしづつ距離を均す春。

焼き鳥の一番奥に届かない
いちばん空に近かつた声

寸草

届きそうで届かない。そのもどかしさは焼き鳥を食べるときに、死者を思うときに来る。あとすこしで、そう思いながら私たちは届かない声を空にあげる。

吹き出しに方言ゆるく括られて

それは南のことばよ、エミリ

塩本抄

「方言」には、共通言語とは異なる言語であるニュアンスがこもる。此処ではない場所の、我々ではない人々の言葉。エミリはそうして言葉から分断される。

過ぎていくすべては二次元

奇天烈な奥行きを見せてね副都心

石井 友禅

過去は連続せず、写真のように細切れな断片として在る。副都心から都心へ地下鉄が貫通するみたいに、過去も未来も三次元に掴むことができたなら。

かすんだ春の
ゴレムの街に
天ぷらさみしく
匂ひます

入山 夜鶴

ゴレムは「未完成のもの」。現代におけるゴレムは生前、死後の存在やA.I.も含まれるかもしれない。ゴレムの街の営みが人間に似ているとしたらそれは哀しい。

真空の都市を想像させている

あなたがふれる布越しの背に

高遠みかみ

あなたの指先は服を着た私の背中にどんな夢を見ているのだろう。想像させるのであればいつそ時間が永久に保存された都市の文明の美しさのような未知を。

夢的な形容詞たちで火傷して
わたしは石の裏へ這つてゆく

土屋ゴンベイ

美しい夏キリシマ。儂い羊たちの祝宴。恐るべき子どもたち。美麗で蠱惑的な形容詞はときに言葉を疲弊させる。蜥蜴の私はひんやりと湿つた意味の翳りへ。

あまりにも絶望の毛が深いので
手持ちのクツキーぜんぶ並べた

にわ

絶望の毛深さに世界が遮られてしまいそうなとき。カワウソが獲物の魚を川岸に並べる獣祭のように、手持ちのささやかな希望としてクッキーを並べてみる。

寝たふりのおもちゃを

全部茹でてみる

内海千智

声をかけてもおもちゃはみな寝たふりを決め込んでいる。昼間はあんなに賑やかだったのに。煮えたぎる湯にそれらを放り込む親の夜の仕事。

手放すなら視覚、と決める望月の

わたしは新しい月見塔

小川 未優

視界を失った月見塔の私は丘の上に立っている。人々は私の身体を登り、私の代わりの目となって、この身体じゅうに満月のひかりを満たしてくれるだろう。